

大型筏に乗ったのは、軍旗と一部の本部要員のみ。他の将兵は、四、五人の組みとなり、竹五、六本の小さな筏を作り、装具を積み、身を託して行くのである。

数日来、上流地点で渡った他部隊の内、精根尽き果たし、溺死した屍体が「ガス」で膨張し、胴体が一抱えにも膨れ上がって、腹を上に向け、流されて来た何万の将兵の死体で埋め尽くされていた」

航空整備兵

—終戦の年の心召—

神奈川県 山田 富 続

昭和十九（一九四四）年五月、小生が勤務していた高座海軍工廠総務部人事課において、ある日突然、上司より「君は当廠の基幹要員なので兵役延期の申請をしておいたから了解してもらいたい」と告げられた。小生もそれほど期待されているのかと少々照れたが「そうですか、ありがとうございます」と回答しておいた。

戦局は緒戦の勢いを失い、今や一億総決起と神州不滅の思いを信じながら、毎日銃後の守りと軍需品生産に粉骨碎身、各人汗して戦っていた。

昭和十九年七月に入り、当局より町役場を通して矢継ぎ早に左記のような通達指示あった。

七月三日 徴兵検査に関する通達事項

七月二十八日 壮丁皆泳鍛錬訓練 一日

八月二十八、二十九日

現役入営兵予習教育 二日

九月九、十日 壮丁軍事教育査閲 二日

九月二十二日 入営兵馬事実習訓練 二日

以上のことは、その都度職場に報告し、了解のもとに、これら訓練教育に参加した。参加の都度、戦局の説明があり、風雲急で、日本帝国存亡の危機を告げられ、日本男子の覚悟と心構えをひしひしと感じざるを得なかった。私は職場の関係上戦局の厳しさを密かに感じていたが、職責上誰にも話すわけにはゆかなかった。

明けて昭和二十年一月中旬、一通の手紙が配達された。召集令状であった。父母弟姉妹等は、くるものがきたと、心に受けとめたらしい。

入隊先は航空機整備の教育隊であることが、ある事情通の方を通してほぼ判明しました。当時の機上搭乗整備士は操縦士と共に花形であった。

入隊に備えて種々の準備があり、職場でも小生が初めてとのことで記念写真を撮って下さった。

国旗には市川書記が岡村廠長閣下をお願いして揮毫して下さいました。総務部長、班長、主計、その他の方々に頂いた心のこもった署名は本当に心より有り難かった。署名をお願いに行くたびに「お国のために」「銃後を守る私たちのために」などの言葉と共にかたい握手には思わず身の引き締まる思いであった。

昭和二十年二月二十一日、降りだした雪は夜になっても降り続け、翌二十二日出陣の日が思いやられた。

翌二十二日には一面の銀世界、積雪三十センチ以上、晴れ上がった雪景色は朝日に映えて、この見事な景色は出陣を祝うようであった。

雪化粧された金毘羅神社境内の積雪の中に、早朝より桜株部落(大和市福田、上和田周辺)の皆々様有志のお見送りは本当に有り難かった。山下町内会長の挨拶と音頭により武運長久を祈り万歳を三唱して、これが故郷の最期の見納めかと積雪中に高座渋谷駅を目ざして力強い一歩を進めた。

当日の夜は福島県郡山駅下車、近くの旅館に宿泊し、明朝入隊に万全を期す。慌ただしさの中、疲れとも、興奮とも知れぬ思いを抱きつつ、夜の眠りにつく。

翌朝、隊から出向いてきた係員に引率され隊に到着する。それぞれ各自の氏名を呼ばれて内務班兵舎に入る。今まで着用の私服を軍服に着替える。皆一様に見事に一人前の初年兵に見えてきた。お互いに見合って神妙な表情となる。

さあ翌日より「関東軍」特有の内務班教育が始まった。「起床が遅い」「声が小さい」「動作がにぶい」「飯の盛りつけ動作が悪い」「銃の手入れ不備」「整頓がなっていない」などと、次から次へと気の休むひまもない。しかし小生は中学生時代グライダーの苛酷な訓練を体験していたので営内生活は苦にならなかった。食事も小食であったために量は十分であった。食欲の良い者は大変ひまじい思いであつたらしい。

営内生活で一番苦労したのは支給品の員数合わせ

せである。軍靴がいつの間にか紛失していたのは本当に参つた。これもビンタをもらつて班長指導で解決。教育期間中大変良かったのは野外訓練と射撃訓練であつた。

野外訓練は白銀の中、太陽に照り輝く雪中に散兵線を展開、銃を手に匍匐訓練、指が寒さにかじかんで引金も引けぬような状態であつた。訓練終了の休憩時には数人ずつに分散して、農家等で休ませてくれた。鳥肉の「カンプラ」（馬鈴薯）と葱の入った温かい雑煮は、全く言葉にならぬ、心にしみ込む温かいもてなしであつた。日本民族特有の惻隱そくいんの情の発露であると思われる。

射撃訓練は小生の視力が良かったのか、それとも小銃の性能が良かったのか？ とにかく標的訓練では五発全部命中、中隊で一番、大いに面目を上げた。賞品の甘味品は全部タバコに消えたが、この待望の射撃訓練は期間中僅かに二回のみで残念であつた。

五月中のことであつた。郡山市が米軍の空襲を

受けた。無差別爆撃である。翌朝、我々は、とりあえず軍装を整えて救援に出動した。しかし当時の我々教育隊の装備ではこの惨状を処理する能力はなかった。商店街も民家も焼夷弾により焼野原となり、あちらこちらに黒こげの遺体が処理されず痛ましい惨状であった。悪らつと云おうか、米軍の行動は交戦国に果せられた「戦時国際条約」の非戦闘員に対する攻撃禁止の条項は弊履のごとく扱われていたのである。

四十八人中隊員の中で幹部候補生受験資格者は十人に満たなかった。通常訓練終了後、夕食が終わり、各自の自由時間を利用して約二時間、一日おきに補修講義を受けていた。五箇条の軍人勅諭の暗唱の時は、まっ先に手をあげ、先ず五箇条を述べ、その後落度のないようにゆっくりと暗唱を続けたが、途中で、「よしそれまで」と声がかかりまぼつとした。その後この件について小生に指名はなかった。

教育期間中井上中隊長に呼びだされ「もう少し

頑張れ」と云われたのには少々ショックを受けた。三カ月の検閲も終わり、幹候生合格の発表あり、甲幹合格者は元気の良い松下君と小生の二人だけであった。合格はしたものの予備士官学校は空襲により失い、現地教育に専念するより方法がなかった。特に航空機整備は現地教育が重要だといわれていた。

六月末小生は部下二十五人を引率して九州の熊本県の教育隊に転属を命ぜられた。任地に向う列車より米軍無差別空襲による東京の焼野原、また横浜の焼跡を車窓より眺めながら、米軍の非道なる非戦闘員までも無差別に殺戮する戦略に思わず怒りを感じた。

二日ばかりで熊本県人吉の教育隊に到着する。休む暇もなく全員無事到着の申告をするが、着任早々申告に元気がないと一喝されたのには驚いた。半地下式の兵舎生活、湿っぽい感じはしたが構造は良く出来ていた。少々の機銃掃射にもビクともしないとされた。

着任後ホッとする間もなく空襲警報、ムスタングP51の機銃による地上掃射には驚いた。あのすごい弾丸の音、正に口径の大きい機銃の威力を目の当たりにみた。蛸つぼにころがりこんで弾丸をよける。雨期なので蛸つぼの中は半分雨水、そんなことにはこだわってられない。下半身ずぶぬれで我慢する。空襲の都度数人であついで移動出来る仮設の小屋があつた。これは飛行場のあちこちに移動して敵機の視線をまどわすものであつたが効果のほどは不明であつた。

そんな毎日の戦いの中に隊員はいつの間にか半分になつていた。小生の反対側に居住しておられる将校は軍医中尉の方で、毎朝軍刀を肩に御出勤、帰りはいつか見かけたことがなかつた。七月の終わり、小生たちも宮崎県の都城陸軍飛行場特攻基地に転属を命ぜられる。戦況は全く判然としない。長崎に新型爆弾が投下されたとのこと、威力が絶大である事が強調された。ある日赤とんぼ練習機に爆弾搭載のためのバランスを取るため、砂袋

の装着作業をした。作業しながら思った。これで戦えるのか、戦果が上るのか、相手は何か、防備の少い輸送船か、または動かぬ目的物かと……。

なぜか、私たち整備方は特攻隊出撃の現場には行かせなかつた。生垣をへだてた搭乗員たちの兵舎からは、毎晩元気の良い軍歌が切れることなく流れて来た。

「萬朶の桜か 襟の色 花は吉野にあらし吹く日本男子と 生れなば散兵線の 花と散れ」と。

またあるときの夕暗せまるころ、女性のすすりなく声が脳裏にこびりついて忘れることができなかつた。

祖国のため、故郷のため、父母兄弟姉妹のため、愛しき人たちのために幸あれ、若き青春の命をにっこり笑って、機上の人となり飛び立ち散って行かれた若人の心境は……。日本男子の本懐そのものであつたと思われる。

都城の特攻基地も何となく静かになった。八月十五日突然戦闘中止。天皇陛下の玉音放送があり、

なかなか聴き取れなかった。とにかく戦いは終わった。張りつめていたものが身体から抜けるような気がした。

どのような指令があるかと待機していたら、軍装を整え銃に実弾を装填して熊本の部隊までこられたしとのこと。何かとトラックに乗って部隊に到着したら食糧の確保と運搬に動員された。

実弾装備の理由は一部不穏な人が食糧倉庫を襲撃し、また関門海峡も占領されたとのこと。いずれもデマであった。残務整理に残され、余りなす仕事もなく、九月末ようやく家路につく目安がついた。

ある兵士はどこから手に入れたか新品の搭乗服と毛布を袋に……、小生は通常着用のつなぎ服に飯盒と水筒、野宿用の毛布一枚と、記念のために胸章と階級章を持って帰途についた。

途中、広島駅にて一夜を過ごす。明けて朝、駅より周囲を眺めると、広島市を囲む山の片側だけが茶色に変色していて、新型爆弾の威力のすざま

じさを目の当たりに見て、敵さんの実力をまざまざと実感した。

また車中の人となりなつかしい我が家にたどり着く。連絡なしで帰宅したので家族全員吃驚し小躍りして喜んでくれた。

忘れもしない、帰宅して四、五日後だと思う。軍事郵便と書かれた手紙が配達された。差出人は小生の名前、内容は甲種幹候生に合格、九州の陸軍航空基地にて元気で教育に軍務に精励しているから安心して下さいとの文面で、そばで父はげんな表情であった。

故郷は厚木飛行場とは指呼の間にあり、ここは米軍マッカーサー元師の日本への最初の進駐地である。山下部落の農家の主人が米兵に射殺され緊張がみなぎっていた。

三、四日ほどたってから米軍より行政を通して作業員募集の話があり、すぐには応募しなかったが、兄弟も多く遊んでいる事は許されないので、働きに出ることにした。

駐留軍の仕事は相模原造兵廠の工作機械の撤収作業であった。作業に従事しているとき小学校の先輩より上溝小学校助教任用の話しあり、父母と相談の結果、九月同校に奉職し、安定した一歩を歩みはじめた。

先輩の指導を受けながら教育と云う職の素晴らしさを感じる。教職は聖職であると云う高度の深淵なる倫理の奥義にはなかなか到達出来ず、奉職三年を経過した。

そのとき父の家業の電気工事の仕事が多くなり、「せっかく勤めた教職だが無理はいわぬ。何んとか思案して協力してくれ」とのことであった。職を得て三年。職務にも生き甲斐を感じ、幼さなき純真な児童たちを相手の仕事に、こんな素晴らしき職域はないと思っていた矢先であったが、しかし決断せねばならなかった。

その理由は長男であること、かつ教職の給料が家族の生活を十分に満たし得るには程遠い額であったこと、同時に家業を無視することは困難であ

ったことであった。決断したことに父も家族も喜んでくれた。

家業の業績はゆるやかに確実に上昇していった。収入も増し、昭和二十七年ささやかな事務所兼店舗も設置することが出来た。そして業績の向上と共に小生にとり最良の伴侶が与えられた。

父と小生は業績向上のため、常時仕事についての討論は欠かさなかった。常に対立する意見を調整しながら、結局父の意をくんでなるべく低価格の方針で営業を進めた。結果、従業員、車両も増加し、毎日戦争のような忙しさであった。

このような忙がしさに打ち勝つことが出来たのも、あの戦前戦中の日本の教育の賜であるところづく思う今日である。

敗戦に打ちひしがれた日本国民が世界をアッと言わせた復興の原動力は、あの大東亜戦に身を捧げた英魂、共に戦って故郷に錦をかざった勇士、永遠の勲に輝く特攻隊員の靈魂、二百何万柱の靖国の魂が日本をよみがえらせ、同時に、敗戦から

立ち上がった日本人の力だと信ずる次第です。

平和、平和と唱えますが平和は唱えているだけでは得られません。歴史が証明しているとおり弱肉強食、備なきものは必ず倒されます。いかなる相手でもうかつな事をしたら自己の存亡にかかると思うぐらいに装備と実力を備えないと平和は守れません。

心して平和を唱えましょう。

ルソン島敗残実記 (二)

愛媛県 矢野 正美

組織的な戦車第二師団としての戦闘は終わって、ルソン島は日本軍の敗残・彷徨の戦場と化していました。三月上旬、穴の中で朝食を終え、中隊は総攻撃のための前線基地に向いました。谷川に降り、その支流を上流に三キロばかり行くと川は終わり、山へ上がる小道がありました。今までのような密林ではなく、ブナに似た木の雑木林で、そこを抜けると爆撃で大きな穴がいくつも開いています。遮蔽物のない所では一人ずつが早駆けで走り、目的地に着いたのは十時ごろでした。

ここで私たちの切り込み隊、清野小隊が火焰発射の準備を、藤原准尉の爆薬投てき班は陣地構築です。午後四時ごろになって切り込み隊の戦車隊長が来て、藤原准尉、清野軍曹と私の四人で敵陣地の偵察に出ました。小さな丘の雑木林を進み、